

【ねがいましては】

平成25年4月25日

KYOWA SCHOOL

第270号

「理想との距離」

時折、生徒に生徒を指導してもらうことがあります。ここでは指導法がマンツーマン方式を取っていますので、先ほど指導したと同じ内容のことを、また数分後に指導することが多々あります。

ある時、私がB君に、ある問題の解き方を指導したとします。B君、しっかり理解できたかな・・・と、不安を感じるようなときには、わざと「〇〇君、B君に教えてもらってよ、すごい（イヤミ100倍）教え方上手だよ。」といった具合に任せることがあります。その瞬間、指導を任されたB君は表情が一変、今までのリラックスした表情が、危機感を帯びた表情に激変します。「どうしよう、教えられなかったらどうしよう。」

本気スイッチにモードが変わります。「あのね・・・。」

実は最も学んでいるのはB君本人、指導するには、その問題の全体像を把握できていないと相手にはまったくと言ってよいほど伝えることはできません。そしてその瞬間、B君はとてもよいこころの状態になります。

まず、相手に対し、敬意を持った位置に立ちます。教えてあげるからねといった上から目線的な気持ちはまったくありません。それどころか表情はすでに「ごめんなさい」状態になっています。この時点で、自己中心的な感情は100%消え失せ、目の前の人を必死に覗こうとしています。「わかってきているのかな・・・。」

片や、指導を受ける側の子は、逆に申し訳なさそうな表情を浮かべます。「何とか理解するから、そんなに緊張しないでね。」といった感じで、必死に聞き取ろうとします。これも普段学校で授業を聞いている時のこころの状態とはまったく違っています。

この時点で両者には、共通したものが通っています。『思いやり』です。互いに相手を敬うところです。同級生同士でなかったとしても二人の表情は同じです。

そして無事伝わったとします。B君は、もう一生その内容を忘れることはないと思います。その緊張感をご想像ください。つまり最も勉強したのはB君なのです。

このようなこころの状態を『学び』を常態化できていたら・・・。

助け合う勉強です。

その逆を並べてみます。

A君がB君に、ある問題の解き方を聞いてきました。しかし、B君はあり乗り気ではありません。なぜなら定期テストが近づいてきているため、結構難易度の高い問題についての質問には抵抗があったのです。「この問題、オレ、解くのに2時間かかったのに、今、こいつに教えたとしたら・・・。」あとにご想像におまかせします。

常に競争が常態化している空間では、このような心理は極自然なのかもしれません。

ここでは、テストなし、競争なし。誰もが自由に自分を真正面から見つめながら取り組みます。ただし、そうではない子もいます。まだここへ来て間もない子です。

命令される、宿題がある、テストがある。そのような環境の中で過ごしてきた子たちは、そろって勉強に対する恐怖心を身につけています。もうひとつ・・・勉強を嫌いになっています。ですから、勉強の中で助け合うなどということは考えもしないことだと思います。自由に取り組むことを知ったとき、その子は間違いなくある方向に向かいます。『楽』です。嫌なことはやらなくて良いわけですから、楽なことをします。目の前の自分しか写っていない状態です。

ここへ長く通っている子たちの行動です。常に歩もうとします。自分に欠けている所を自ら探し、取り組もうとします。分からなければすかさず質問。取り組み方も自分流、声を出しながら向かう子、じつくりと静止状態になる子、すぐさま質問に現れる子。それぞれが個性を持った生き方をします。

わたしはそれが学びだと思っています。自分らしさの発見です。ぼくには私には、そんな生き方しかできません。ある意味頑固なのかもしれません。しかしある意味、もうその若さで自分のルールをしっかりとした足取りで歩いています。自立です。

学校制度の中では、こころの成長には評価はありません。自分はどうあるべきなのか。自分はどのような人生を歩もうとしているのか。自分にはこんな目標がある。中学3年生であれば、ほとんどが高校入試にこころ全体が覆われてしまうときに、「高校入試は自分にとってのひとつの小さな門、どんな門でもくぐったら、またその門の先を目指して歩み続けるだけさ・・・。」そんな涼しい表情が伝わってきます。こころの成長・・・評価5です。

そしてB君にもどります。やっとのことで教え終わった後、目の前の子から素敵なプレゼントをもらいます。

「ありがとう」

二人の間に深い思いやりが育った瞬間です。

今、この教室では、6年生が中学3年生の数学を学んでいます。周りからは羨ましい視線が飛び交います。そしてある中3の子がひと言「Aちゃんが高校数学を教わったら、わたし教えてもらおう！」

そんなあったかい空気をこわしたくありません。だからこれからも、競争なし・・・。ありがとね。